

# 入域観光客1000万人時代の 沖縄観光を展望する

## 一 沖縄観光1000万人時代



●株式会社前田産業ホテルズ代表取締役社長 前田 裕子  
(沖縄振興審議会専門委員会 委員)

●一般財団法人沖縄観光コンベンションビューロー会長 下地 芳郎

●沖縄総合事務局次長 仲程 倫由

沖縄のリーディング産業である観光について、第一線で活躍する、下地氏、前田氏を迎え、入域観光客 1000 万人時代の沖縄観光の課題と展望についてお話を伺いました。

**仲程** 2018年度の入域観光客数が目標としていた1000万人を超え、沖縄観光は1000万人時代を迎えました。これまで、官民が協力しながら様々な取組が行われてきましたが、下地さんはどのように感じられていますか。

**下地** 1975年、海をテーマとした沖縄国際海洋博覧会を機に沖縄の観光が本格的にスタートしました。

その後、1992年の首里城の復元で新たに文化がテーマとして加わり、海と文化という2大テーマで取り組んできたところです。また最近では、MICEといったビジネスを目的とした、新しい観光地としての沖縄も認知度が高まっています。それは、沖縄振興特別措置法に伴う制度的な措置や一括交付金など官民あげた取組による成果だと思います。

**仲程** 特にこの5、6年はインバウンドの急増などで、沖縄への観光客がこれまで以上の早さで増加していると感じます。

**下地** まさに、外国人観光客の急激な増加は、ここ数年の特徴です。それは、海外からのLCCなどの格安路線の就航、大型クルーズ船の寄港、円安、ビザの緩和など様々な要因が重なった結果だと思います。

前田さんは、北部でホテルを経営されており、また名護市観光協会の理事長も務められていますが、最近の沖縄観光の状況、そして北部地域の観光の現状をどう見ていていますか。

**前田** 2002年の沖縄美ら海水族館の開館が大きな契機となり、多くの観光客が北部を訪れるようになりました。また、インフラ面でいうと、北部への移動手段として、空港から本部町、今帰仁村までのバスの直行便も運行するようになり運転の出来ない観光客や初めて沖縄を訪れるビギナーの方にも便利になってきたと感じています。

**仲程** 観光客1000万時代を迎えた沖縄観光が今後も自律的に成長し、国際的なリゾート地として発展して行くためには乗り越えなければならない様々な課題があると思います。ハード・ソフトの両面から、今後どのようなことが必要とお考え

## 沖縄観光の抱える課題

でしょうか。

**下地** ハード面の課題としては、今年、那覇空港第2滑走路の完成や

ルーズバースが完成しますが、目的地までの2次交通は早急な対応が必要でしよう。

ソフト面では、観光収入である県内の消費額の増加が課題であり、今後、滞在日数や土産品等の販売の増加などが必要でしよう。

## 一観光人材の確保

**仲程** 沖縄観光の質を更に高めるためにも、観光に携わる人材の確保、育成が大変重要だと思います。沖縄観光の人材の現状と育成の方策についてもお願いします。

**下地** 沖縄観光が発展するためには、産業を支える人材の育成、活用、強化の視点は非常に重要であり、特に次の3点が重要だと考えてています。

まずは、家庭内や教育現場での観光教育の徹底。観光がなぜ沖縄に必要なのかをしつかり教えることだと思います。

次に、高度な観光人材育成の強化。理論だけでなく、より実践的な例えば、ビックデータの解析ができるような高度人材育成などが必要だ

と思います。

最後が、社会人の学び直しの重要な性。変化が激しい時代で、かつて学んだことが役に立たないこともあります。そのため、観光産業のみならず幅広い産業の方々が、経済や経営、ホスピタリティの在り方など、幅広い分野で学び直すことが重要だと思います。

**前田**

私のいるホテル業界でも、現場を動かす管理職クラスは、日々、時代の変化に対応することを求められています。どうやって人の心をつかんでいくかといった、マネジメントやマーケティングなどのビジネススキルを磨いていくことは非常に重要です。

また、観光業界で働く我々が、あこがれを持っていたくことも重要です。私は、よく、「新3K」と言っているのですが、「きちんとしている」「格好いい」「給料・休日がいい」の3つを目指しています。

「きちんとしている」というのは、法令遵守。食品の安全管理はもちろん、雇用・就労環境がちゃんとしていること。「格好いい」というのは見えた目の問題ではなく、客のニーズを察する力など、人間力を磨くこと。「休日・給料がいい」というのは最も難しいのですが、生産性向上や働き

方改革などで社員にどのように還元していくか、マネジメントを行う側の課題だと思います。

**仲程** 若い人たちが、観光業界に就職したいという希望を持てるような状況になつて欲しいですね。

**下地** 私が会長としての目標の一つに、観光人材の表彰制度の確立があります。今までも、社内で優秀な社員を表彰するというものはあります。たが、それはあくまで社内に留まるものです。観光立県という以上、沖縄全体で評価制度を確立し、観光業界の地位を高めることが大切。裏方まで含めた幅広い人たちに脚光があたるような制度を構築していけばと 생각ています。

**前田**

ホテル業界では、地域あつての観光業という考え方から、地域とコラボした料理を出すなど、地元品を使う意識が高まっています。一方で量の問題から、県外品も使わざるを得ない状況もあります。

**仲程**

最近では、観光客の増加が、地域の活性化に貢献していない、地域経渉の発展に結びついていないという話も聞かれますが、ご意見をお聞かせ下さい。

**下地** 県内外の企業も含めて、観光に携わるプレイヤーが多様化してきたことも要因でしよう。観光客のニーズに応えるためには県内の企業だけでは対応できず、県外、海外の企業

の持つているノウハウ、また、食材などに頼らざるを得ない状況もあります。次產品にしても土産品にしても、県産品の普及・拡大が十分に図られていないこと、が、県内企業が観光の効果が十分に感じられない原因だと思います。県内の農林水産業、製造業、また地元の商店街も含めて、県内のプレイヤーがより連携をし、それぞれのスキルや製品・サービスの強化を図ることで、県内の供給率を高め、県内の企業、地域が観光の効果を実感できるような仕組みづくりが必要と考えます。

また、地域の活性化には、観光づくりではなく、生活する住民のための快適な地域づくりも重要な思います。何か特別なものを作ることではなく、清潔なトイレや、休憩するベンチ、わかりやすい案内板など基本的なことが重要です。地元の住民にとって過ごしやすい地域づくりが、観光客の満足度も高め、それが



前田 裕子

株式会社前田産業ホテルズ代表取締役社長。1989年にプリンスホテル（株）の勤務を経て、1993年に（株）前田産業入社。ホテルマハナウェルネスリゾートオキナワの管理部長、常務取締役などを歴任。沖縄県観光審議会の委員や、内閣府観光振興審議会専門委員会の委員、また、名護市観光協会の理事長。2006年より現職。

域ごとにしっかりと行うことが必要です。そうすることで十分に解決できる問題だと思っています。

## 一 北部の秘める可能性

つながっていくと考えます。

**仲程** 観光客の増加は、地域の活性化だけでなく、時には地域住民の生活等に影響を与えることもあります。最近、オーバーツーリズムとい

う言葉も聞かれるところですが、観光客の増加による地域住民の生活への影響についてどう感じていますか。

**下地** 観光客の増加により県民生活に影響が出ていることは沖縄県の住民意識調査の結果からも明らかで

す。しかし、そのことで沖縄全体がオーバーツーリズムであると考えることは、誤ったメッセージを届けてしまうことになるので注意が必要です。その上で、専門家の中で示される一定の対策、例えば、ITを活用し、観光客や観光地の分散を図る方法や、一部については時間帯や曜日によって規制を行うなど、様々な対策を地

**仲程** 北部地域の発展は県全体の振興からいつても大きな課題であり、観光の点からみると、本島中南部、宮古、石垣に比べて、これからという部分があると思っています。北部地域の観光の現状と今後の振興についてどうお考えですか。

**前田** 沖縄美ら海水族館ができて、北部を訪れる観光客は急増しましたが、その全てが北部に滞在しているかというとまだまだです。しかし、2025年の開業を目指したテーマパークの建設構想もあり、開業による周辺への波及効果にも期待しています。

今、北部には民間企業の観光施設や店舗、多様な形態の宿泊施設も増えしており、それぞれの個性を活かして集客されています。しかし、それが点で頑張っている状況を、北部全体という面で捉え、それらをどう結び付けるかの視点も重要でしょう。

今後、本部港にクルーズ船のバースが建設予定です。また、北部は世界自然遺産登録も目指しており、登

録されたら自然を楽しみたい欧米の富裕層がクルーズ船で訪れるなど客層にも多少の変化が出てくるのではと考えています。

また、北部に空港の整備も必要でしょう。例えば、自然だけを楽しみたい場合は北部に直接入って満喫するなど、観光客の過ごし方の選択肢を増やすこともあります。最近では、休暇中に旅先で仕事をするワーケーションという新しい働き方がありますが、それを北部で行ってもらう取組も行っています。北部の自然を楽しみながら、仕事をするという、新しい北部観光の在り方も滞在日数を延ばすことにつながると考えます。

**下地** 2021年からは、欧州のクルーズ会社が、県内離島を巡るクルーズ旅行の提供を始めます。約180名乗りの小型船で、久米島、座間味などを周遊し、船が着岸出来ない離島でも、小型ボートで上陸し、探検クルーズを行うものです。本部や国頭、伊平屋、伊是名も含めて、ボートが着けるエリアがあれば、そこから上陸して探検することができる。探検クルーズ型というのは今後、大きな可能性を秘めていると感じました。



仲程 倫由

沖縄総合事務局次長。1983年に総理府入府後、内閣府政策統括官（沖縄担当）付参事官（沖縄総合調整担当）付企画官、内閣府大臣官房参事官（総務課担当）、沖縄総合事務局総務部長などを歴任。2015年より現職。

## よみがえれ！首里城

**仲程** 昨年、首里城正殿が火災により焼失するという非常に痛ましい出来事がありました。沖縄県民の誇りであり、観光の拠点でもある首里城正殿の火災による観光への影響やその対応、そして再建への思いをお聞かせください。

**下地** 首里城が焼失したことは、非常に残念な思いが強いです。一方で、沖縄の観光振興という視点では、県民、観光客も含めて、改めて首里城の意義を再確認した上で、一刻も早い再建が必要でしょう。沖縄全体の観光の視点では、減少にはつながっ

たままに北部にはぴったりです

ていません。一方で、首里城及び首里近辺への観光客誘致は大きな課題と考えます。そうした状況の中、関係機関と議論を重ねながら、対策に取り組んでいるところです。また、旅行業界からも首里城そして沖縄を応援するキャンペーンをしてほしいとの要望もあり、昨年11月に、「よみがえれ！首里城」という、緊急キャンペーンロゴマークを発表しました。



首里城再建に向けた  
キャンペーンロゴ (OCVB 提供)



下地 芳郎

一般財団法人沖縄観光コンベンションビューロー会長。1981年に沖縄県入庁後、沖縄県香港事務所所長、沖縄県文化観光スポーツ部観光政策統括監などを歴任。2013年に沖縄県庁を退職。同年、琉球大学観光産業科学部観光課学科教授に就任。2018年より、国際地域創造学部大学院観光科学研究科教授に就任。2019年より現職。

首里城正殿は残念ながら焼失してしまいましたが、首里近辺にはまだまだ多くの観光資源があり、まずは沖縄に来てもらい、首里を訪れてもう一件事情に優先して取り組んで行きたいと思っていきます。中長期的には首里城正殿が

復元はもちろん大事ですが、耐震や防火なども重要だと感じています。そして、もっと身近に感じられるような造り方、時代に合った形での再建を望んでいます。

**下地** 今の首里城正殿は見せるための施設です。それは意義があつたことですが、今後、再建していく際には、もっと実用的に、使うための機能も必要と感じています。新しい時代には、かつてのようなく、外交、政治、文化の拠点としての首里城の姿も必要だと個人的には感じています。

## これからのおもろい展望について

**仲程**

入域観光客が1000万人時代を迎え、質、量ともに更にその上を目指していく沖縄観光の今後の展望についてお聞かせ下さい。

焼失したことにより、沖縄の魅力が下がらないように、国内外への沖縄に大切に育っていく事です。発展をも先々を見据えた観光地形成していく事や、それに対応していく事が観光業界に携わる我々の使命だと思っています。

**前田** 私も心にぽっかり穴が開いた思いでした。しかし、今回ることは、沖縄だけでなく、県外や世界中の方にとつても首里城への強い思いがあることを再認識する機会にもなりました。

復元はもちろん大事ですが、耐震や防火なども重要だと感じています。そして、もっと身近に感じられるような造り方、時代に合った形での再建を望んでいます。

**下地** 今の首里城正殿は見せるための施設です。それは意義があつたことですが、今後、再建していく際には、多くの観光客を受け入れたらしいだけの時代は終わりました。「住んでよし、訪れてよし」という基本に対しても、「受け入れてよし」といった、観光客を受け入れることでさらに地域が活性化することが必要でしょう。経済効果もそぞらだし、外国人観光客との交流による教育的効果など、観光の持つ力をフルに發揮できる地域を目指すことがとても大切です。沖縄観光が1000万人時代を迎える次は2000万人時代ではなく、これ

**前田** 私の夢は、自然と昔ながらの

沖縄が残る“北部”という地域を丁寧に大切に育していく事です。発展を

失速させずに、経済的にも情緒的にも先々を見据えた観光地形成していく事や、それに対応していく事が観光業界に携わる我々の使命だと思っています。

**下地** 観光は平和へのパスポートという考えがあります。世界の人たちが集う、交流をする場所が優れた観光地であるということを理念として持つたいと考えています。沖縄の島々は、それを実現するための十分な可能性を秘めています。

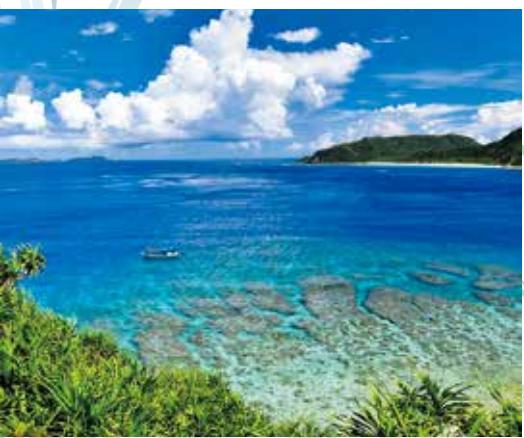
一方で、世界が求めているSDGs（持続可能な開発目標）という視点でみた場合に、多くの観光客を受け入れたらしいだけの時代は終わりました。「住んでよし、訪れてよし」という基本に対して、「受け入れてよし」といった、観光客を受け入れることでさらに地域が活性化することが必要でしょう。経済効果もそぞらだし、外国人観光客との交流による教育的効果など、観光の持つ力をフルに發揮できる地域を目指すことがとても大切です。沖縄観光が1000万人時代を迎える次は2000万人時代ではなく、これ

までの量を中心に据えた考え方から多様な視点での観光地を目指すこと有必要でしょう。

2020年は大きな節目の年で

ス。サミットの開催、首里城跡の世界文化遺産登録から20年が経ち、更に、世界自然遺産への登録が期待される年でもあります。首里城の火災という大きな出来事がありました

が、それを乗り越えて、大きな進歩の年にしていくという気持ちを、県民が等しく持ち取り組むことで、沖縄の観光はより強いものになるでしょう。



出典：OKINAWA41 (<https://www.okinawa41.go.jp/>)